

足柄の坂に過るに、死に人を見て作る歌一首

一八〇〇番

小垣内の 麻を引き干し 妹なねが 作り着せけ  
む 白たへの 紐をも解かず 一重結ふ 帯を  
三重結ひ 苦しきに 仕へ奉りて 今だにも 国  
に罷りて 父母も 妻をも見むと 思ひつつ 行  
きけむ君は 鶏が鳴く 東の国の 恐きや 神  
のみ坂に 和たへの 衣寒らに ぬばたまの  
髪は乱れて 国問へど 国をも告らず 家問へど  
家をも言はず ますらをの 行きのまにまに こ  
こに臥やせる